2023 年 9 月 30 日

第 38 回加藤周一文庫公開講読会

『続羊の歌』「一九四六年」（前半）

日本学術振興会特別研究員
立命館大学授業担当講師
猪原　透

【本章の梗概】

本章の前半では 1946 年以降の加藤の状況が、後半では西洋に対する日本と自分自身の「後れ」について加藤が考えたことが述べられている。

1946 年には多くの雑誌が創刊され、それを舞台に「戦後文学」の時代が幕を開けた。本章はそのうちのいくつかの雑誌を取りあげて、加藤がいわゆる「文壇」にデビューしていく姿が描かれている。それまで日本社会における少数派・よそ者であり、「高みの見物」をする観察者として自らを位置づけてきた加藤であったが、敗戦後の「文壇」のなかに多くの仲間を見出し、初めて時代の機運のなかにいることを意識する。しかし、まもなくその仲間たちとも言葉が通じ難いことを発見し、再び自身が少数派であることを認識することになる。

敗戦後の加藤はまた、様々な分野において日本の「後れ」を痛感し、それをとり戻す必要を感じていた。専門である血液学においてはアメリカに、文学においてはフランスの抵抗の文学に学ぶことで「後れ」をとり戻そうとした。文学の「後れ」に関してはそれを日本そのものの「後れ」にまで遡って見極める必要があると考えたが、同時に自分自身の文学理解の「後れ」についても自覚するようになった。

加藤はこのとき、科学（血液学）における「後れ」を取り戻すためアメリカに留学するのか、それとも文学における「後れ」をとり戻すためフランスに留学するのか、大きな岐路に立たされていたが、ともあれ未来は「後れ」をとり戻すための変化に向けて開かれているという高揚感のなかにあった。

【本章の内容・次章との関係】

①時期：広島での調査団から戻り、フランスへの留学に出発するまでの約 5 年間。

②対象：本章においては公的な活動（文筆業と血液学研究）、次章においては私的な活動（京都の女、京都の庭園、母との死別、西洋見物への出発）が描かれる。

③加藤の自己形成における位置づけ：本章では仲間との「言葉の通じ難さ」（コミュニケーションにまつわる文化的問題）に加え、西洋に対する「日本の後れ」と「自分自身の後れ」が意識される過程が、次章では日本の美術と自身のつながりを知るために「西洋見物」に出発する過程が描かれる。

⇒　ふたつの章を通して日本文化を論じる基本的な方法――西洋と日本の比較――を獲得。

【第１段落】

①戦争の末期に燈火管制の川口市に集って、仲間の出征を見送るために酒を飲んでいた青年たちの多くは、生きのびて東京の焼け野原に帰って来た。彼らが召集されたときには、彼らを南太平洋の戦場へ送る輸送船はもはやなくなっていたし、彼らが火炎びんを抱いて戦車の下に飛びこむはずであった「本土決戦」は、遂におこらなかった。②この青年たちは戦場を知らず、軍隊生活の不合理だけを知り、中国人を殺した経験をもたず、自分たちが殺される期待の経験だけをもっていた。未来のために生きたことがなく、今や未来をみずから決定する必要を感じていたのである。青年たちは、再び、占領下の東京に集って、③同人雑誌「世代」をつくった。そのなかには、後に経済学者となった日高晋や、宮沢賢治について画期的な本を書いた詩人中村稔も混じっていた。④私は二人の小説家、福永武彦、中村真一郎と共に後に三人の共著、「一九四六　文学的考察」として刊行したいくつかの文章を、「世代」に連載した。

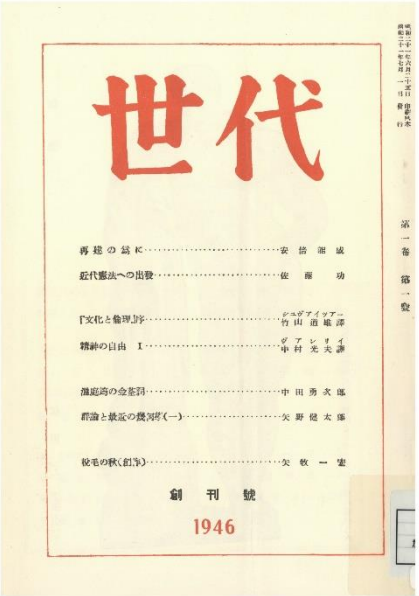
①「戦争の末期に燈火管制の川口市に集って……」

・『羊の歌』「青春」（旧版 194-195 頁、改版 220-221 頁）を参照。加藤のほか、遠藤麟一朗やいいだもも（飯田桃）が参加しており[1]、彼らが雑誌『世代』を創刊した。

・川口市に集った人々は、輸送船は「もはやなくなっていた」（＝戦争の終わりが近いことを予感していた）が、本土決戦がおこることを予期していた（＝自らの死を予期していた）。しかしその本土決戦は「遂におこらなかった」。それがこの「世代」の戦争経験である。

②「この青年たちは戦場を知らず……」

・知っていること／知らないこと、経験をもつこと／経験をもたないこと、これまで／これから、を対照することで「この青年たち」（遠藤・いいだ）の戦争経験を描写。



③「同人雑誌「世代」」

・先述した遠藤麒一朗（1924－1978）や、いいだもも（1926－2011）を中心に、1946 年 7 月に創刊された。いずれも第一高等学校の国文学会の関係者であり、加藤や中村真一郎らへの執筆依頼もその縁による。

・中村真一郎による回想では、国文学会には「一種の自由な雰囲気のようなもの、しかし、時代の潮流に対しては極めて戦闘的だった態度」があり、その仲間が創刊した『世代』で執筆する際には「戦争中の国文学会の雰囲気の延長で」書いたという[2]。

---

[1] いいだもも・中村稔・日高晋「われらアプレゲールの青春――雑誌『世代』の軌跡――」『世界』389 号（1978 年）282 頁。

[2] 中村真一郎『戦後文学の回想』（筑摩書房、1963 年）52－53 頁。

・加藤、中村、福永は無論のこと、のちにマルクス経済学者として有名になる日高晋（1923-2006）、詩人の中村稔（1927-）、小説家の吉行淳之介（1924-1999）などが『世代』を通して世に知られるようになった。終刊（1953 年）までにわずか 17 号だけを出した雑誌だが、その歴史的役割は大きかった。

④「私は二人の小説家、福永武彦、中村真一郎と共に……」

・『世代』創刊号から第 6 号までに掲載された「CAMERA EYES」のこと。「焦点」「時間」「空間」という 3 つの主題を、3 人が交互に担当した。連載終了後に『一九四六　文学的考察』として単行本化（真善美社、1947 年）。共著ではあるが、加藤の最初の著書である。。

・『一九四六　文学的考察』の巻頭には以下のように書かれている。「三人の筆者〔中略〕は共通の世代に属する。即ち、第一次大戦終了と略々時期を等しくして生れ、満州事変以後の所謂、軍国主義時代を学窓に過した、知識階級の青年である」。

〇段落全体に関すること

・なぜ『世代』に関する話題を冒頭に配置したのか[3]。以下の 3 つの理由が想定される。

（1）「CAMERA EYES が注目を集め、その後の加藤の生き方を決定したたね。

（2）身近な人間から戦前には交流のなかった人へと、関係が広がっていく様子を描くため。

（3）自らの属する「世代」の経験や特徴を明確にしておく必要があると考えたため。

【第 2 段落】

①二人の小説家は、そこで小説という形式の未来を考えていた。中村は、巧妙に――と私には思われた――二つの観点を織り交ぜ、いくさのまえから東京の文壇で小説と考えられてきたものは、実は小説の特殊な一形式にすぎないということを強調していた。もし「源氏物語」と「失われし時をもとめて」が小説の典型であるとすれば、「自然主義」以来の「私小説」は、ほとんど小説と言い難いほどのものではないか。また英仏の一八世紀以来の小説の歴史を辿ってみれば、技法上の進展に伴って小説の世界の拡大してきたことはあきらかであり、今頃、第三人称の人物の言動を委細もらさず描きだす「自然主義」流の方法に固執するのは、時代錯誤の甚だしいものではないか。ということを考えた上で、それならば最新式の小説の技法はどういうものであるか、たとえばウィリアム・フォークナーについてみれば、②こういう仕掛けがあるということを、福永が書き、中村は何故新しい技法が必要なのかということを説き、③それがどんなものであるかということを説明していたのである。④思うに中村真一郎は、文学者として世に知られるまえに、文学の専門家であったし、福永武彦は、小説家として生活しはじめるまえに、職業的小説家であったのであろう。

[3] 加藤は 1946 年 3 月から荒正人・小田切秀雄ら『近代文学』関係者が創刊した『文学時標』に執筆している。これに対し「CAMERA EYES」は同年 7 月に連載を開始した。

①「二人の小説家は、そこで小説という形式の未来を考えていた」
・『世代』に連載された中村真一郎・福永武彦の文章に関する記述。中村は「文学の専門家」、福永は「職業的小説家」であると述べて、『世代』をその出発点として位置づけている。
・『世代』の連載は三人の打ち合わせなしで進められたが、「いくさのまえから東京の文壇で小説と考えられてきた」私小説への批判ないし相対化という共通の関心を抱いていた、と加藤は見ている。

②「こういう仕掛けがあるということを、福永が書き、」
初出時：「こういう仕掛けがあるということは、福永が詳しく書いていた。」
⇒　一文を長くする方向に書き改めている。意図はよくわからない。

③「それがどんなものであるかということを説明していたのである」
・これは中村のことを指しているのか、それとも主語を省略して福永のことを指すのか？

④「思うに中村真一郎は……」
・中村は「ペトロニウスの饗宴」などで、私小説を『源氏』と『失われし時をもとめて』によって相対化し、「小説の歴史」に照らし合わせて「時代錯誤」であることを示した。加藤はのちに中村について、「二〇世紀の、すなわち彼自身の時代の、文学者の役割を「前衛」のそれと同一視した」と述べている[4]。
・福永の場合は、中村よりも小説家の仕事について実践的に語る文章となっている（「文学の交流」など）。しかし、「最新の」西洋の小説を参照し、日本の小説の「時代錯誤」を批判するという点では中村と共通している。
・中村・福永とは対照的に、加藤が『世代』の連載で日本の古典文学を取り上げたことを際立たせることが狙いか。

【第3段落】

①私はいくさの間、同時代の作家の小説よりも、「新古今集」の時代の歌人の家集を読んで暮らしていた。私にとって文学とは、まずなによりも「山家集」や「拾遺愚草」や「金槐集」であり、時代を超えて私の魂に訴えるものであった。②私は定家や実朝について書いた。③しかし私が詩人について書くことができたのは、軍国主義が亡びて、言論出版の自由が認められるようになったからである。私は、それまで書くことのできなかった私が、書くことのできるようになったということについても書いた。④すなわち戦後の民主主義の理想を讃美し、併せて、いくさの間戦争讃美の説教を聞かされ、その馬鹿馬鹿しさにうんざりした申し分をも吐露しようとしたのである。

[4] 加藤周一「中村眞一郎あれこれ」『夕陽妄語』2（筑摩書房、2016年）348頁。

①「私はいくさの間、同時代の作家の小説よりも……」

・「同時代の作家」を読まないのは、同時代への不満があり、また同時代を賛美する同時代の小説への不満があったから。一方、「新古今集」の時代の歌人を読んだのは、個々の歌人への共感に加えて、それが同時代において低く評価されていたから。

・ここで名前が挙げられているのは、西行『山家集』、藤原定家『拾遺愚草』、源実朝『金槐集』。このうち西行について敗戦直後は論じておらず[5]、別の文章では建礼門院右京太夫集に言及している。『新古今集』とその時代については「風巻景次郎を通じて知った」という[6]。

・上記の歌人に共通するのは（戦争中の加藤と同じく）「孤独な人間」であり、しかし自らの孤独を直視したこと。

②「私は定家や実朝について書いた」

・定家については、「藤原定家――『拾遺愚草』の象徴主義」（『文藝』1948 年 1 月号）。定家は平安貴族が没落する時代のなかで平安貴族の抒情詩を洗練させた人物であり、源実朝はその定家に師事した。加藤は戦中から敗戦直後にかけて実朝にたびたび言及している。

「無能の将軍が、力強い歌人であったのは矛盾ではない。行動を放棄する過程が、詩的認識の過程に他ならず、外的現実を相対化する過程が、内的現実を抜き差しならぬ所で成熟させる過程に他ならないという、現実に対して精神がとり得る一つの究極的な態度の裡に、実朝と云う歌人の本質がある」[7]

⇒　権力から遠ざけられ、自らの死を予期したが、それを詩的認識・内的現実を成熟させる糧とした実朝。加藤は戦時下の自己を実朝に投影した。

③「私は、それまで書くことのできなかった私が……」

・戦時下では書くことができなかった「詩人」が具体的に誰を指すのかは不明。（反時代的ではあるが）日本の古典である定家や実朝よりも、フランスの「抵抗」の詩人について書くことは困難であったということか。

④「すなわち戦後の民主主義の理想を讃美し……」

・戦後民主主義の理想を「讃美」し、併せて戦争「讃美」にうんざりしたことを「吐露」する、という表現には、当時の自己に対する『羊の歌』執筆時点での評価が現れているように思われる。

---

[5] ただし「寓話的精神」（『1946　文学的考察』に書きおろし）で短く言及。

[6] 加藤周一「日本の抒情詩――古典についての私事にわたる覚書」『「羊の歌」余聞』（筑摩書房、2011 年、初出 1957 年）67 頁。風巻景次郎（1902-1960）は戦前から戦後にかけて活躍した国文学者。『新古今集』をはじめとする中世文学研究は現在に至るまで高く評価されている。

[7] 加藤周一「金槐集に就いて」『加藤周一自選集』1（岩波書店、2009 年、初出 1947 年）110 頁。

【第4段落】

①何が私たち三人には共通していたのであろうか。長い間ひそかに考えつづけて来たことを、あらためて公衆の広場にもち出そうという意志そのものであったのかもしれない。②その広場を私は焼け野原と考えていた。京都哲学と日本浪漫派、高村光太郎と武者小路実篤が爆撃のもとに崩れ去った焼け野原……③そこには「罹災日録」の荷風と「無尽燈」の石川淳だけしか残されていないように思われた。私は私たち三人の身のまわりの他に、何処かで、誰かが、私たちと同じような考えを、ひそかに養っていたろうとは、考えてもいなかった。しかし東京の焼け跡は、決して無人の荒野ではなかった。

①「何が私たち三人には共通していたのであろうか……」

・同じ連載において、小説という形式の「未来」を考えた中村・福永と、古典を論じ、戦時下・敗戦直後の周囲の愚劣さを痛烈に非難した加藤。一見すると異なる方向を向いているようにみえるが、戦時下の蓄積を敗戦後に「公衆」に向けて発表したという点では同じである。

②「その広場を私は私は焼け野原と考えていた……」

・「信条」章でも「焼け跡」に言及。それは既成の価値観・秩序が崩れ、人々が実力だけを頼りに闊歩する状態であるが、それは軍国主義をはじめとする、時代錯誤と誇大妄想に彩られた「日本的なもの」が破壊された、新しい社会の出発点として肯定的に捉えられている。

・「京都学派と日本浪漫派、高村光太郎と武者小路実篤」は日本的なものを讃美した人々であり、戦争と軍国主義に対して批判精神を持ちえず、むしろ戦争支持の気分を煽り立てたことで「戦争と知識人」(1959年)で厳しく批判されている[8]。彼らの多くは敗戦直後に沈黙を余儀なくされ、その権威は崩れ去った(と加藤は見た)。

③「そこには「罹災日録」の荷風と「無尽燈」の石川淳だけしか……」

・戦前から活動を継続している文学者のなかで、戦争に対する妥協のない批判者として、加藤が例外的に評価するのがこの二人。

・永井荷風(1879-1959)には約40年にわたる膨大な日記『断腸亭日乗』があるが、そのうち1945年の分を抜粋したのが『罹災日録』(1947年刊行)である。同書には「新聞紙ヒツトラ、ムツソリニの二兇戦い敗れて死したる由を報ず」という文言も見られる。ただし荷風の生活と作品を「反時代的プロテスト」とする加藤の見方は戦時下から一貫している[9]。

---

[8] 「武者小路実篤〔中略〕は、敗戦後、戦争中をふり返って、「私はだまされていた」といった。そうかもしれない。しかし「だまされていた」のは、だまされていたいとみずから望んだからである」(加藤周一「戦争と知識人」『加藤周一著作集』7〔平凡社、1979年、初出1959年〕290-291頁)

[9] 加藤周一「FRAGMENTS 生存競争」『加藤周一青春ノート』(人文書院、2019年、初出1941年)224頁。

・戦時下に日中戦争を描いた「マルスの歌」（1938 年）で発禁処分を受けた石川淳（1899-1987）は、戦後に「無尽燈」（1946 年）を発表。加藤はアナトール・フランスやアンドレ・ジッドの翻訳者として石川を知り、「いくさが終って、私は『無尽燈』をよんだ。石川淳の天皇制ファシズムに対する態度が、『罹災日録』の作者の態度と共に、日本の文壇の双璧であったことを知った」と記す[10]。

【第 5 段落】

本郷の病院の二等病室に――まえにも言ったように、私はそこに住んで、週末に目黒区の自宅へ戻る生活を続けていたのだが――①ある日、看護婦が珍しい来客を報せに来た。病室の扉をあけてみると、昼なお暗い廊下に、体格のよい見知らぬ男が、ものも言わずにつっ立って、こちらを見ていた。病室の中へ招じ入れると、そこには寝台の他に椅子が一つしかなかったので、私は相手に椅子をすすめ、自分は寝台によじ登って腰かけた。そのとき、もの言わぬ訪客は、遂に口を開いて、静かに、ただ一言「キバチ」といった。「キバチ」？新薬の売りこみならば、いきなり名ざしで私のところへは来ないで、まず医局へ訪ねて来るはずだろう。何か秘密結社の名まえでもあるのかと私は考えた。「キバチ」とは、一体何語で、何を意味するのか。「キバチの用で来ました」と、私の客は、こちらの疑心暗鬼には少しも構わず、落ち着きはらっていった、「あなたにもぜひ何かしてもらいたいと思っているわけです……」――それが野間宏であった。②野間宏はそのとき、「キバチ」とは「黄蜂」と書く日本語であり、新しい雑誌の名まえであるということを、そんなことはどうでもよいという口調で説明した。しかし戦争に反対し、「人間尊重」の立場で、文学者が新しい雑誌をはじめるのは、今日もっとも必要なことであると。相手の言うことに疑問を提出するためには、相手の言うことが終わるのを待たなければならない。しかし、「真空地帯」の小説家は、そのときひどくゆっくりと喋っていた。いつまで待ってもその言うことが終わらず、終わったときには、もはや私は自分がほとんど説得されているかのような錯覚に捉われた。③「これまでのような小説ではだめだ」とそのときの野間宏はいった。同じようなことは中村真一郎もいっていた。その内容はそれぞれ別のものであったにちがいないが、④私は「戦後文学」の時代が、まさにはじまろうとしているのを感じた。

①「ある日、看護婦が珍しい来客を報せに来た……」

・野間宏（1915-1991）との実際の出会いもこのようなものであっただろうが、前段落で「誰かが、私たちと同じような考えを、ひそかに養っていたろうとは、考えてもいなかった」とあるように、野間が突然あらわれたことを印象づける書き方になっている。

・最初は「ものも言わずつっ立って」いた男が、「遂に口を開いて、静かに」語りだし、説明が徐々に熱を帯びていく様が描かれる。

---

[10] 加藤周一「石川淳覚書」『加藤周一著作集』6（平凡社、1978 年、初出 1959 年）388 頁。

②「野間宏はそのとき、「キバチ」とは「黄蜂」と書く日本語であり……」
・雑誌の名まえに関する説明が「どうでもよい」のは、新しい雑誌をつくる目的・理念こそが重要だと考えているからだろう。
・文芸誌『黄蜂』(1946 年 4 月創刊、1949 年 2 月創刊）は同誌の創刊号から第 3 号に野間宏『暗い絵』が掲載されたことで知られる。『黄蜂』という名称は、古代ギリシアの劇作家アリストファネスの『蜂』に由来する。民主主義の原理を古代ギリシアに求めようという趣旨である[11]。『黄蜂』を発行した青年文化会議は、丸山眞男、川島武宜、内田義彦、中村哲（政治学者）などの知識人によって運営された文化団体である。
・加藤が『黄蜂』に寄稿した原稿は以下。
　「ヒューマニズムと社会主義」(第 1 巻第 3 号、1946 年)
　「オルダス・ハックスリの最新作『時間は停らなければならない』に就いて」(1949、第 4 巻第 1 号、1949 年)。

③「「これまでのような小説ではだめだ」とそのときの野間宏はいった……」
・野間が亡くなった際、加藤は以下のように書いている。
「彼は世界を、自分自身から切り離すのではなく、自分自身と関連づけて見ようとした。あるいは自分自身と世界との関係、別のことばでいえばその相互超越性そのものを、関心の中心とした。その上で、自分自身を含めての世界の、部分ではなく全体を、見定め、表現しようとしたのであり、それが文学の課題、文学者の任務である、と考えていたのである。〔中略――それはきわめて困難な課題であるが〕野間宏は、文学者であったから、解くことのできる問題よりも、人間にとっての大切な問題を扱おうとしたのである。あるいはそうすることが、彼にとっての「文学」の定義であった、ということもできる」[12]

④「私は「戦後文学」の時代が、まさにはじまろうとしているのを感じた」
・加藤自身が「戦後文学」の時代のはじまりに立ち会っている、時代のなかにいることを印象づける一節。
・野間宏『暗い絵』が角川文庫に収録された際、解説を加藤が書いている。「それは野間の出発点であり、雑誌『黄蜂』の出発点であり、広い意味では、戦後の日本の出発点でさえもあった――少くとも当時はそう考えられた」[13]
⇒　軍国主義のなかで、(単なる軍国主義者ではなく）それに批判的であった青年の不安や苦悩を通して、戦後日本の新たな道を見出そうという野間の姿勢に共感。

---

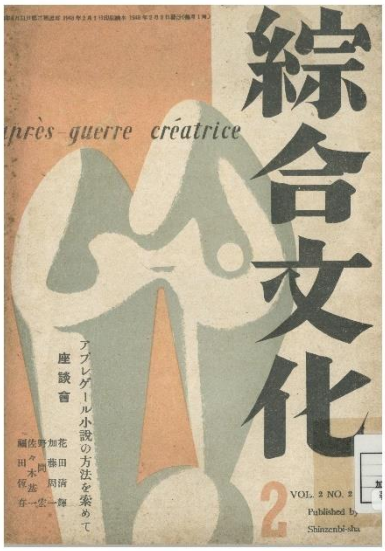
[11] 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』(岩波書店、2018 年）325 頁。
[12] 加藤周一「野間宏または文学の事」『夕陽妄語』1（筑摩書房、2016 年、初出 1991 年）385-386 頁。
[13] 加藤周一「野間宏『暗い絵』解説」『加藤周一著作集』6（平凡社、1978 年、初出 1951 年）377 頁。

【第 6 段落】

①その頃花田清輝は、「綜合文化」という雑誌を主宰していて、その雑誌の編集室には、実にさまざまの人物が集まり、折にふれて談論風発、一種の活気を呈していた。②花田は、いくさの間に「復興期の精神」を書き、古今東西の古典文学を論じるとみせて、実は巧みに軍国主義日本を批判していた人物である。③私はいくさの間その仕事のあることを知らなかったが、戦後はじめて知って、その才能に驚嘆し、その風貌に接するに及んでいよいよ畏敬の念を抱いた。眼光は炯々として射るが如く、長髪は額の生え際から後頭部へ、駿馬のたてがみの如く、流れていた。その口をついて出る言葉は――しばしば私の理解を越えていたけれども、背後にどういう深謀遠慮があるのか測り知れぬ印象を与えた。④そのとき詩人関根弘は、「民衆のエネルギー」を情熱的に説き、物理学者渡辺慧は「共和制」を唱えて屈託がなさそうにみえた。また宮城音弥氏はその専門とする心理学さえもう少し進歩すれば、文学は無用の長物に化するであろうと宣言して、私をおどろかせた。私は抗弁し、議論を上下してみたけれども、私は心理学を知らず、宮城氏は文学をほとんど知らなかったので、話の通じようはなかった。もう一人の心理学者南博氏は、超然として、自分自身とその周囲への諧謔を愉しんでいるようにみえた。⑤「日本人はイデオロギーが好きだからね」と南氏はいった、「こうやっていつまで議論していても飽きないわけだ……」。

①「その頃花田清輝は「綜合文化」という雑誌を主宰していて……」

・花田清輝（1909-1974）は加藤ら『世代』『近代文学』などで執筆していた若い世代を糾合し、綜合文化協会を結成。その機関誌が『綜合文化』（1947 年 7 月創刊、1949 年 1 月終刊）である。発行元は真善美社で、『一九六四　文学的考察』『マチネ・ポエティク詩集』も同社から刊行。



・創刊号に掲載された「宣言」（野間宏起草）は以下の通り。

「敗戦は 1868 年の日本の出発の誤りを明らかにした。そしてわれわれは眼の前の廃墟こそ、われわれの過去の本当の姿であったことを知るのである。あらゆる被ひを戦火にやきつくされたわれわれの生命は、この廃墟のなかではじめて生命の源につきあたる。われわれの出発点はこの敗戦の底に発見した生命である。われわれはこの生命を真に近代的な生命とする使命を担ふ」

・加藤が『綜合文化』に寄稿した原稿は以下。

「亜米利加に学び理性をもとめるための方法序説」（創刊号、1947 年 7 月、巻頭論文）

「（詩）妹に／（小説）三つの話」（1 巻 3 号、1947 年 9 月）

「（詩）雨と風／（詩）さくら横ちょう」（2 巻 1 号、1948 年 1 月）

②「花田は、いくさの間に「復興期の精神」を書き……」

・『復興期の精神』は 1941 年から 43 年にかけて『文化組織』に掲載され（原題「ルネッサンス的人間の探求」）、1946 年に我観社（真善美社の前身）から刊行された。

・花田は戦時下の日本を「転形期」と位置づけ、「転形期をいかに生きるか」という主題をルネサンス期の人物を通して論じた。初版の跋文には以下のようにある。
「戦争中、私は少々しゃれた仕事をしてみたいと思った。そこで率直な良心派のなかにまじって、たくみにレトリックを使いながら、この一連のエッセイを書いた。良心派は捕縛されたが、私は完全に無視された。いまとなっては、殉教者面ができないのが残念でたまらない。思うに、いささかたくみにレトリックを使いすぎたのである。一度、ソフォクレスについて訊問されたことがあったが、日本の警察官は、ギリシア悲劇については、たいして興味がないらしかった」[14]

③「私はいくさの間その仕事のあることを知らなかったが……」
・花田はマチネ・ポエティクの同人に深く期待し、加藤と中村を綜合文化協会の理事に任命して作品発表の機会を与えた。『綜合文化』という誌名も加藤の提案による。
・ただし、その作品（『復興期の精神』）の意図を読み解くことが難しいように、当人も難解な人物であった。以下は中村真一郎の回想。
「〔花田清輝は〕本質的には孤独で気心の知れないところがあり、個人的な親愛というようなものは戸口から閉めだしてしまうことが、現代の人間形成の初歩だと信じているようなところがあった（それに比べれば、プロレタリア文学運動における最後の世代としての『近代文学』旧同人は、個人としてはわかり易く、交際上、困惑を与えることはなかった）」[15]

花田清輝（1946 年撮影）[16]

④「そのとき詩人関根弘は……」
・『綜合文化』編集室における「談論風発」の風景を描いたもの。綜合文化協会には多様な立場の学者、文学者、ジャーナリストが参加しており、一種のサロンのような性格を備えた。
・関根弘（1920-1994）……詩人。日本共産党員としても活動。
・渡辺慧（1910-1993）……物理学者。『思想の科学』同人としても活動。
・宮城音弥（1908-2005）……心理学者。小説は作者の性格や心の内面、あるいは社会心理の表現であり、芸術（詩）と科学的心理学の中間に位置する鵺的存在であるという[17]。
・南博（1914-2001）……心理学者。いわゆる「日本人論」に関する多くの著作を残した。

---

[14] 花田清輝「復興期の精神」『花田清輝全集』2（講談社、1977 年、初出 1946 年）420 頁。
[15] 同上、86 頁。
[16] 高橋英夫『花田清輝』（岩波書店、1985 年）。
[17] 宮城音弥「文学と私」『人間診断』（読売新聞社、1954 年）。

⑤「「日本人はイデオロギーが好きだからね」と南氏はいった……」
・おそらく実際にあった会話であろう。サロン的な場の描写の最後に台詞を置く手法は、「仏文研究室」でも使われている。
・「イデオロギーが好き」なので「いつまで議論していても飽きない」が、裏を返せばいつまでも共通の理解に達することができないということ（宮城音弥と加藤の議論のように）。

〇段落全体に関すること
・同じ世代・同じ関心をもつ人々との交際から（第1～5段落）、異なる世代・異なる関心をもつ人々との交際へと話が広がっていく（第6～7段落）。しかし、それに伴って「話の通じ難い」事態に直面することも現れる。
・第6段落では多くの人名が挙げられているが、第7段落にはひとつも挙げられていない。前者は「関心（専門）の違い」「個性」に由来する話の通じ難さを描き、後者は「世代」に由来する話の通じ難さを描こうとしているためか。

【第7段落】

①私が「近代文学」の批評家たちと知合うようになったのも、またその頃のことである。②そこでは「政治と文学」ということが頻りに論じられ、「近代文学」の同人たちは、政治に文学を従属させてはならないと主張していた。それは、嘗ての左翼文学のように、革命の道具として文学を扱ってはいけない、という意味であったろう。③三〇年代に身をもって左翼の文学運動に投じ、そこで苦労を重ねてきた人々にとって、そういう考えは当然のことであったにちがいない。しかし私はそういう苦労を経験したことがなかったので、「政治」という言葉から、少数の野党である共産党よりも、まず占領軍と保守党政府のかけ引きを考えた。「政治と文学」と聞いて、ただちに「革命運動と文学」を考える思考上の、または修辞上の、習慣は私にはなかった。④今にして思えば、「近代文学」の批評家たちは、私を遇するのに寛大な好意をもってしたのである。しかしそのことは話の通じ難いという事実を変えるものではなかった。

①「私が「近代文学」の批評家たちと知合うようになったのも……」
・雑誌『近代文学』（1946年1月創刊、1964年8月終刊）は、荒正人・平野謙・本多秋五・埴谷雄高・山室静・佐々木基一・小田切秀雄の7人によってはじめられた。
・佐々木基一、山室静の仲介により『近代文学』への寄稿が始まり、1947年7月に加藤は同人として正式に加入した。
・加藤が『近代文学』に寄稿した主な原稿は以下（座談会にも多数参加）。
「ジャン・ゲノに就いて」（1巻5号、1946年9月）
「マチネ―・ポエティクとその作品に就いて／（詩）妹に」（2巻3号、1947年4月）
「IN EGOISTOS」（2巻5号、1947年7月、巻頭論文）

②「そこでは「政治と文学」ということが頻りに論じられ……」
・政治に対する文学の自律（＝目的のためには手段を択ばない政治悪を克服し、文学を人間尊重の理念の上に置き直す）を唱えた平野謙（1907－1978）および荒正人（1913－1979）と、それを反革命的だと非難した中野重治のあいだで生じた論争。

③「三〇年代に身をもって左翼の文学運動に投じ……」
・ここでの記述の背景にあるのは、加藤の論説「IN EGOISTOS」に端を発する論争[18]。
⇒　エゴイズムの力を認め、そこから出発してヒューマニズムに至るべきとを唱えた荒を、加藤は痛烈に批判。エゴイズムからヒューマニズムは出てこないし、エゴイズム中心の人間観は私小説中心の文学観に対応するものであるという。
・荒も加藤を痛烈に批判し、いわゆる「星菫派論争」へ。
・同じ「政治と文学」を論じても、「共産党」と文学の関係を問題とする『近代文学』旧同人と、「占領軍と保守党政府のかけ引き」と文学の関係を問題とする加藤とでは、対話は成り立ち難かった。その背景には、戦前から戦時下にかけての体験の相違が存在。

④「今にして思えば……」
・最終的に加藤らは『近代文学』の同人から脱退するが、プロレタリア文学者ではない加藤らを一度は迎え入れ、その直後に巻頭論文（「IN　EGOISTOS」）、翌月には編集後記を書かせている。マチネ・ポエティクの理論や実作を掲載しているのもかなりの厚遇であった。

【第 8 段落】

軍国主義が亡びるや、言うべくして言えなかったことを言おうという人々は東京の焼け跡のいたるところに現れ、類をもって集ろうとしていた。①私は周囲に決して「虚脱の時代」をではなく、「大きな期待の時代」を見た。②そのときはじめて、そしておそらくそのときを最後に、私は時代の機運のなかにいる自分を感じた。しかし私が多くの仲間を発見したときは、同時にまた、その仲間のなかでの言葉の通じ難さを発見した時でもあった。③別の言葉を話す相手とのコムミュニケイションの問題について、私を意識的にしたのは、後年の欧洲ではなくて、戦争直後の日本である。

①「私は周囲に決して「虚脱の時代」をではなく、「大きな期待の時代」を見た」
・「信条」章にも「戦後の虚脱状態」という文句に関する指摘がある。戦争を讃美した政治家、知識人、ジャーナリストは「虚脱状態」に陥ったかもしれないが、加藤を含めて戦争に批判的であった人々にとっては「言うべくして言えなかったことを言う」機会がようやく到来したのであり、未来への期待に溢れていた。

---

[18] 加藤周一「IN EGOISTOS」『近代文学』2 巻 5 号（1947 年）。書き出しは「エゴイストたちは、いつまで、我々の忍耐を試そうとするのか」で、キケロ「カティリーナ弾劾演説」のパロディ。

②「そのときはじめて、そしておそらくそのときを最後に……」
・加藤はほとんどの生涯を少数派として、「高みの見物」をする観察者として過ごしている。しかし敗戦後のみ、「時代の機運のなかにいる自分を感じた」（＝多くの仲間を発見し、また時代の機運と自身の主張が一致していると感じた）。

③「別の言葉を話す相手とのコムミュニケイションの問題について……」
・多くの仲間を発見したが、まもなくその仲間との「言葉の通じ難さ」を感じるようになった。「別の言葉を話す相手」とは、同じ言葉を違った意味で用いる相手である。

〇段落全体に関すること
・この段落までが同人雑誌と作家に関する話題であり、次段落から商業雑誌と編集者の話題に移る。「同人」であるにも関わらず議論が成りたたない、という状況を描くために、同人雑誌の話題を前半に集めたのだろう。

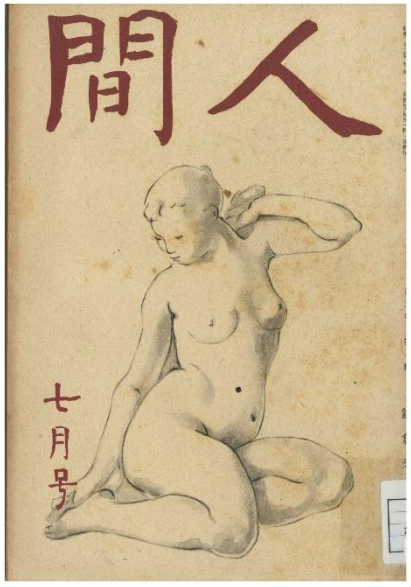
【第 9 段落】

①無名の青年であった私たちが同人雑誌をつくって、それぞれ言いたいことを言っていたときに、鎌倉在住の有名な小説家は、互いの私財をもち寄って、「鎌倉文庫」という出版社をつくり、月刊の文芸雑誌「人間」を発行した。②その編集長木村徳三氏が、「一九四六文学的考察」を読み、私たち三人に、雑誌「人間」への寄稿をもとめたことがある。「はじめて書いていただくのだから、高い原稿料は出せませんけれどね」と木村氏はいった、「内容は自由に、何でも書きたいことを書いてもらって、結構ですよ」。私はそのときまで原稿料というものを受けとったことがなかった。私の売文業は、木村氏の好意と「人間」とによって、はじまったのである。木村氏は「文壇」という市場の裏表に精通していた。どの執筆者とどの編集者との間には売手市場が成りたち、どの執筆者とどの編集者との間には買い手市場が成りたつかということをよく心得ていた。③しかしそのこととは別に、一種の文学的な理想を編集を通じて実現しようとしていたようにも思われる。④そういう理想主義は、「展望」の編集長臼井吉見氏にもあり、「世界」の編集長吉野源三郎氏にもあった。⑤配給の衣食足りず、闇市が栄え、巷に「米よこせ」運動の赤旗がなびいていたとき、東京には抜くべからざる理想主義があったのである。⑥私はいくさの間の見聞を粉飾した小説「ある晴れた日に」を、雑誌「人間」に連載した。

①「無名の青年であった私たちが同人雑誌をつくって……」
・久米正雄、川端康成、小林秀雄、高見順などが蔵書をもち寄って貸本屋「鎌倉文庫」を作り、これが出版社へと発展。雑誌『人間』は久米正雄、里見敦などによる戦前の同人雑誌の名まえを継承したもの。編集長は木村徳三[19]。

[19] 木村徳三『文芸編集者　その跫音』（TBS ブリタニカ、1982 年）227 頁以下。

・加藤が『人間』に掲載した主な原稿は以下。
「信仰の世紀と七人の先駆者」（2 巻 7 号、1947 年 7 月）
「革命の文学と文学の革命――「ユーロープ」誌の役割に就て」（2 巻 9 号、1947 年 9 月）
「（小説）悪夢」（『人間』別冊 1、1947 年 12 月）



②「その編集長木村徳三氏が、「一九四六　文学的考察」を読み……」
・木村徳三に加藤らを紹介したのは、中島健蔵であったらしい。木村の回想では、（書籍ではなく）『世代』の連載を読んでいる[20]。
・なお鎌倉文庫からは他にも、女性向け雑誌『婦人文庫』や、一般社会人向け雑誌『社会』、ヨーロッパ文学紹介雑誌『ヨーロッパ』が刊行され、加藤はそのすべてに寄稿している。

③「しかしそのこととは別に……」
・『人間』は新しい日本文学を建設するため新人作家の発掘に取り組んだ（三島由紀夫など）。創刊号の編集後記は以下。

> あの敗戦の晩夏に、見わたすかぎりの惨憺たる焦土を前にして、幾たびか、絶望なすところなく佇みつくさなかつたひとがあつたらうか。しかしまた、荒廃の風景に点描された菜園の鮮かな緑のいろに、涙の出るほどの感動を味ははなかつたひとがあつたらうか。〔中略〕我々はその緑の色に再建日本の表象を読みとつたのだ。そしてそれを育て燦然たらしめるこやしとしての文学の役割の重大さに烈しく思ひ及んだのである。／「人間」はあくまでこの文学の役割が十全に果されんがための最も充実せる場でありたい。[21]

・『人間』はまた、当時の雑誌では稀であった長編小説の連載に積極的に取り組んだ。それまでの長編小説は新聞連載による大衆文学が主流であり、それとは異なる本格的な長編小説が必要であると考えたためである。『ある晴れた日に』の連載もそうした発想による。

④「そういう理想主義は……」
・臼井吉見（1905－1987）は、1946 年 1 月創刊の『展望』（筑摩書房）の編集長。文芸評論家としても活躍した。加藤は『展望』に、「途絶えざる歌――フランスの「抵抗」と詩人たち」（38 号、1949 年 2 月）やサルトルに関する文章を寄稿している。
・吉野源三郎（1899－1981）は、1946 年 1 月創刊の『世界』（岩波書店）の編集長。平和と民主主義を基本理念に掲げ、対日講和条約に際しては全面講和の論陣を張った。加藤は 62 号（1951 年 2 月）に「龍之介と反俗精神」を寄稿しているが、本格的な寄稿は 1955 年以降。

---

[20] 同上、257 頁。
[21] 同上、235 頁。

⑤「配給の衣食足りず、闇市が栄え、巷に「米よこせ」運動の赤旗がなびいていたとき」
・敗戦後には食糧不足が悪化し、各地でデモが発生した。特に 1946 年 5 月 19 日に起った「食糧メーデー」では、労働組合や日本共産党の呼びかけで皇居前広場に 25 万人が集まる。

⑥「私はいくさの間の見聞を粉飾した小説「ある晴れた日に」を……」
・「ある晴れた日に」は『人間』4 巻 1 号から 4 巻 8 号（1949 年 1 月～8 月）に連載。1950 年に月曜書房から刊行された。
・末尾の文章がよく知られている。「ある晴れた日に戦争は来り、ある晴れた日に戦争は去った」。戦争がいかに「銃後」の人間関係を破壊したかを描いた。軽井沢が主要な舞台であり、「加藤自身も軽井沢に逃避した星董派ではないか」という批判への反論としても読める。

〇段落全体に関すること
・加藤が著述によって収入を得るようになる経緯が描かれる。「売文業」という言葉を用いて、「医業」と並ぶ「業」であることを強調。それを手引きしてくれたのが「「文壇」という市場」に精通する編集者であった。
・ただしその編集者も期待と理想にあふれており、これまでの段落で触れられてきた作家・詩人と同じく、敗戦直後の「戦後文学」の時代を担った人々であった。

【第 10 段落】

私は相変わらず医者の仕事をしていた。①相変わらず無給ではあったが、第一には、長い習慣のすでに抜き難いものとなり、第二には、医学そのものへの興味が津々として尽きず、第三には、もし経済的な必要があれば、医を業として口を糊することを期待していたからである。しかしその必要はおこらなかった。「人間」以後新聞雑誌の註文に応じて作文すれば、とにかく暮してゆくことができるようになった。②私は医を業として文筆を道楽するのではなく、文筆を業として医を道楽とする生活をつづけることになった。

①「相変わらず無給ではあったが……」
・過去（長い習慣）、現在（医学そのものへの興味）、未来（医を業として口を糊することを期待）の順に、医者の仕事をつづけた理由を挙げる。

②「私は医を業として文筆を道楽するのではなく……」
・「医を業として文筆を道楽」としたのは、森鴎外・木下杢太郎・斎藤茂吉である。加藤はそれと似て異なる道を辿ることになった。
・医業を廃する可能性はこの時期から念頭にあった、あるいは医業を廃して文筆業（売文業）を仕事とするようになることは自然な流れであった、ということを示そうとしている。
・ただし「医を道楽とする」とは、医学への知的好奇心が尽きなかったということでもある。